

赤いくつ

DE RODE SKO

ハンス・クリスティアン・アンデルセン Hans Christian Andersen

青空文庫

あるところに、ちいさい女の子がいました。その子はとてもきれいなかわいらしい子でしたけれども、貧乏だったので、夏のうちははだしであるかなければならず、冬はあつぽつたい木のくつをはきました。ですから、その女の子のかわいらしい足の甲こは、すつかり赤くなつて、いかにもいじらしく見えました。

村のなかほほどに、年よりのくつ屋のおかみさんが住んでいました。そのおかみさんはせつせと赤いらしやの古切れをぬつて、ちいさなくつを、一足こしらえてくれました。このくつはずいぶんかっこうのわるいものでしたが、心のこもった品で、その女の子にやることになっていました。その女の子の名はカレンとい

いました。

カレンは、おつかさんのお葬式そうしきの日に、そのくつをもらって、はじめでそれをはいてみました。赤いくつは、たしかにおとむらいいにはふさわしくないものでしたが、ほかに、くつと違ってなかつたので、素足すあしの上にそれをはいて、粗末くそまつな棺かんおけのうしろからついていきました。

そのとき、年とつたかつぶくのいいお年よりの奥さまおくをのせた、古風な大馬車だいばしやが、そこを通りかかりました。この奥さまは、むすめの様子をみると、かわいそうになつて、

「よくめんどろをみてやりとうございます。どうか、この子を下さいませんか。」と、坊さんぼふにこういつてみました。



こんなことになったのも、赤いくつのおかげだと、カレンはおもいました。ところが、その奥さまは、これはひどいくつだといつて、焼きすてさせてしまいました。そのかわりカレンは、小ぎつぱりと、見ぐるしくない着物を着せられて、本を読んだり、物を縫ぬったりすることを教えられました。人びとは、カレンのことを、かわいらしい女の子だといいました。カレンの鏡は、

「あなたはかわいらしいどころではありません。ほんとうにお美しくっていらつしやいます。」と、いいました。

あるとき女王さまが、王女さまをつれてこの国をご旅行になりました。人びとは、お城のほうへむれを作つてあつまりました。そのなかに、カレンもまじっていました。王女さまは美しい白い

着物を着て、窓のところにあらわれて、みんなにご自分の姿が見えるようになさいました。王女さまはまだわかいのので、裳裾もすそもひかず、金の冠かんむりもかぶっていませんでしたが、目のさめるような赤いモロツコ革のくつをはいていました。そのくつはたしかにくつ屋のお上さんが、カレンにこしらえてくれたものより、はるかにきれいなきれいなものでした。世界じゆうさがしたって、この赤いくつにくらべられるものがありましたでしょうか。

さて、カレンは堅信礼けんしんれいをうける年頃になりました。新しい着物ができたので、ついでに新しいくつまでこしらえてもらって、はくことになりました。町のお金持のくつ屋が、じぶんの家のしごとべやで、カレンのかわいらしい足の寸法をとりました。そこ

には、美しいくつだの、ぴかぴか光る長ぐつだのがはいった、大きなガラス張りの箱ばが並んでいました。そのへやはたいへんきれいでしたが、あのお年よりの奥さまは、よく目が見えなかったの
で、それをいっこういいともおもいませんでした。いろいろとく
つが並んでいるなかに、あの王女さまがはいていたのとそっくり
の赤いくつがありました。なんとという美しくつでしたろう。く
つ屋さんは、これはあるはくしやく伯 爵 のお子さんのためにこしらえた
のですが、足に合わなかったのですといいました。

「これはきつと、エナメル革がわだね。まあ、よく光ってること。」
と、お年よりはいいました。

「ええ。ほんとうに、よく光っておりますこと。」と、カレンは

こたえました。そのくつはカレンの足に合ったので、買うことになりました。けれどもお年よりは、そのくつが赤かったとは知りませんでした。というのは、もし赤いということがわかったなら、カレンがそのくつをはいて、堅けんしんれい信礼を受けに行くことを許さなかつたはずでした。でも、カレンは、その赤いくつをはいて、堅信礼をうけにいきました。

たれもかれもが、カレンの足もとに目をつけました。そして、カレンがお寺のしきいをまたいで、唱歌所の入口へ進んでいったとき、墓石の上の古い像ぞうが、かたそうなカラーをつけて、長い黒い着物を着たむかしの坊さんや、坊さんの奥さんたちの像までも、じつと目をすえて、カレンの赤いくつを見つめているような気が

しました。それからカレンは、坊さんがカレンのあたまの上に手をのせて、神聖な洗礼のことや、神さまとひとつになること、これからは一人前のキリスト信者として身をたまたなければならぬことなどを、話してきかせても、自分のくつのことばかり考えていました。やがて、オルガンがおごそかに鳴って、こどもたちは、わかいうつくしい声で、さんび歌をうたいました。唱歌組をさしずする年とつた人も、いっしょにうたいました。けれどもカレンは、やはりじぶんの赤いくつのことばかり考えていました。

おひるすぎになって、お年よりの奥さまは、カレンのはいいてたくつが赤かった話を、ほうぼうでききました。そこで、そんなことをするのはいやなことで、れいぎにそむいたことだ。これか

からお寺へいくときは、古くとも、かならず黒いくつをはいていかなくなくてはならない、と申しわたしました。

その次の日曜は、堅信礼のあと、はじめての聖餐式せいさんしきのある日でした。カレンははじめ黒いくつを見て、それから赤いくつを見ました。——さて、もういちど赤いくつを見なおした上、とうとうそれをはいてしまいました。その日はうららかに晴れていました。カレンとお年よりの奥さまとは、麦畑のなかの小道を通っていきました。そこはかなりほこりっぽい道でした。

お寺の戸口のところまつばづえに、めずらしいながいひげをはやした年よりの兵隊が、松葉杖にすがって立っていました。そのひげは白いというより赤いほうで、この老兵はほとんど、あたまが地面に

つかないばかりにおじぎをして、お年よりの奥さまに、どうぞくつのほこりを払わせて下さいとたのみました。そしてカレンも、やはりおなじに、じぶんのちいさい足をさし出しました。

「はて、ずいぶんきれいなダンスぐつですわい。踊るとき、ぴつたりと足についていますように。」と、老兵はいつて、カレンのくつの底を、手でぴたぴたたたきました。

奥さまは、老兵にお金を恵んで、カレンをつれて、お寺のなかへはいつてしまいました。

お寺のなかでは、たれもかれもいつせいに、カレンの赤いくつに目をつけました。そこにならんだのこらずの像も、みんなその赤いくつを見ました。カレンは聖壇せいだんの前にひざまずいて、金の

さかずきをくちびるにもっていくときも、ただもう自分の赤いくつのことばかり考えていました。赤いくつがさかずきの上にかかっているような気がしました。それで、さんび歌をうたうことも忘れていけば、主のお祈しゅをとなえることも忘れていました。

やがて人びとは、お寺から出てきました。そしてお年よりの奥さまは、自分の馬車にのりました。カレンも、つづいて足をもちあげました。すると老兵はまた、

「はて、ずいぶんきれいなダンスぐつですわい。」と、いいました。

すると、ふしぎなことに、いくらそうしまいとしても、カレンはふた足三足、踊の足をふみ出さずにはいられませんでした。す

るとつづいて足がひとりで、どんどん踊りつづけていきました。カレンはまるでくつのしたいままになっているようでした。カレンはお寺の角のところを、ぐるぐる踊りまわりました。いくらふんばってみても、そうしないわけにはいかなかったのです。そこで御者がおっかけて行って、カレンをつかまえなければなりませんでした。そしてカレンをだきかかえて、馬車のなかへいれましたが、足はあいかわらず踊りつづけていたので、カレンはやさしい奥さまの足を、いやというほどけりつけました。やつとのこと、みんなはカレンのくつをぬがせました。それで、カレンの足は、ようやくおとなしくなりました。

内へかえると、そのくつは、戸棚にしまいこまれてしまいました

た。けれどもカレンはそのくつが見たくてたまりませんでした。

さて、そのうち、お年よりの奥さまは、たいそう重い病気にかかって、みんなの話によると、もう二どとおき上がれまいということでした。たれかがそのそばについて かんびょう 看病して世話してあげなければなりませんでした。このことは、たれよりもまずカレンがしなければならなかつとめでした。けれどもその日は、その町で大舞踏ぶとうかい会がひらかれることになっていて、カレンはそれによばれていました。カレンは、もう助からならしい奥さまを見ました。そして赤いくつをながめました。ながめたところで、べつだんわるいことはあるまいとかがええました。——すると、こんどは、赤いくつをはきました。それもまあわるいこともないわ

けでした。——ところが、それをはくと、カレンは舞踏会ぶとうかいにいきました。そして踊りだしたのです。

ところで、カレンが右の方へ行こうとすると、くつは左の方へ踊り出しました。段段だんだんをのぼって、げんかんへ上がろうとすると、くつはあべこべに段段をおりて、下のほうへ踊り出し、それから往来に来て、町の門から外へ出てしまいました。そのあいだ、カレンは踊りつづけずにはいられませんでした。そして踊りながら、暗い森のなかへずんずんはいつていきました。

すると、上の木立こだちのあいだに、なにか光ったものが見えたので、カレンはそれをお月さまではないかとおもいました。けれども、それは赤いひげをはやしたれいの老兵で、うなずきながら、

「はて、ずいぶんきれいなダンスぐつですわい。」と、いいました。

そこでカレンはびっくりして、赤いくつをぬぎすてようとおもいました。けれどもくつはしつかりとカレンの足にくつついていました。カレンはくつ下を引きちぎりました。しかし、それでもくつはぴったりと、足にくつついていました。そしてカレンは踊りました。畑の上だろうが、原っぱの中だろうが、雨が降ろうが、日が照ろうが、よるといわず、ひるといわず、いやでもおうでも踊って踊って踊りつづけなければなりませんでした。けれども、よるなどは、ずいぶん、こわい思いをしました。

カレンはがらんとした墓地ぼちのなかへ、踊りながらはいつていき

ました。そこでは死んだ人は踊りませんでした。なにかもつと
もしろいことを、死んだ人たちは知っていたのです。カレンは、
にがよもぎが生えている、貧乏人のお墓はかに、腰をかけようとしま
した。けれどカレンは、おちつくこともできなければ、休むこと
もできませんでした。そしてカレンは、戸のあいているお寺の入
口のほうへと踊りながらいったとき、ひとりの天使がそこに立っ
ているのをみました。その天使は白い長い着物を着て、肩から足
までもとどくつばさをはやして、顔付きはまじめに、いかめ
しく、手にははばの広いぴかぴか光る剣を持っていました。

「いつまでも、お前は踊らなくてはならぬ。」と、天使はいいま
した。「赤いくつをはいて、踊っておれ。お前が青じろくなくなつて

冷たくなるまで、お前のからだがしなびきって、骸骨がいこつになってしまふまで踊っておれ。お前はこうまんな、いばつたこどもらが住んでいる家を一軒けん、一軒と踊りまわらねばならん。それはこどもらがお前の居ることを知って、きみわるがるように、お前はそ
の家の戸を叩かなくてはならないのだ。それ、お前は踊らなくてはならんぞ。踊るのだぞ——。」

「かんにんしてください。」と、カレンはさげびました。

けれども、そのまに、くつがどんどん門のところから、往来や小道を通って、畑の方へ動き出していつてしまったものですから、カレンは、天使がなんと返事をしたか、聞くことができませんでした。そして、あくまで踊って踊っていなければなりませんでし

た。

ある朝、カレンはよく見おぼえている、一軒の家の門かどぐちを踊りながら通りすぎました。するとうちのなかでさんび歌をうたうのが聞こえて、花で飾られたひつぎが、中からはこび出されました。それで、カレンは、じぶんをかわいがってくれたお年よりの奥さまがなくなったことを知りました。そして、じぶんがみんなからすてられて、神さまの天使からはのろいをうけていることを、しみじみおもいました。

カレンはそれでもやはり踊りました。いやおうなしに踊りました。まつくらの闇の夜も踊っていないければなりませんでした。くつはカレンを、いばらも切株の上も、かまわず引っぱりまわしま

したので、カレンはからだや手足をひっかかれて、血を出してしまいました。カレンはとうとうあれ野を横ぎって、そこにぽつんとひとつ立っている、小さな家のほうへ踊っていきました。その家には首切役人くびきりやくにんが住んでいることを、カレンは知っていました。そこで、カレンはまどのガラス板を指でたたいて、

「出て来て下さい。——出て来て下さい。——踊っていなければならぬので、わたしは中へはいることはできないのです。」と、いいました。

すると、首切役人はいいました。

「お前は、たぶんわたしがなんであるか、知らないのだろう。わたしは、おのでわるい人間の首を切りおとす役人だ。そら、わた

しのおのは、あんなに鳴っているではないか。」

「わたし、首を切ってしまったてはいやですよ。」と、カレンはいました。「そうすると、わたしは罪を悔い改めることができなくなりますからね。けれども、この赤いくつといっしよに、わたしの足を切ってしまったてくださいいな。」

そこでカレンは、すっかり罪をざんげしました。すると首斬役人は、赤いくつをはいたカレンの足を切ってしまいました。でもくつはちいさな足といっしよに、畑を越えて奥ぶかい森のなかへ踊って行ってしまいました。

それから、首切役人は、松葉杖といっしよに、一つの木のつぎ足を、カレンのためにこしらえてやって、罪ざいにん人がいつもうた

うさんび歌を、カレンにおしえました。そこで、カレンは、おのをつかった役人の手にせつぷんすると、あれ野を横ぎつて、そこを出ていきました。

（さあ、わたしは十分、赤いくつのおかげで、苦しみを受けてしまったわ。これからみなさんに見てもらおうように、お寺へいってみましよう。）

こうカレンはこころにおもって、お寺の入口のほうへいそぎましたが、そこにいきついたとき、赤いくつが目の前でおどっていました。カレンは、びっくりして引つ返してしまいました。

まる一週間というもの、カレンは悲しくて、悲しくて、いじらしい涙を流して、なんどもなんども泣きつづけました。けれども

日曜日になったとき、

（こんどこそわたしは、ずいぶん苦しみましたし、たたかいもしてきました。もうわたしもお寺にすわって、あたまをたかく上げて、すこしも恥じるところのない人たちと、おなじぐらいただしい人になったとおもうわ。）

こうおもいおもい、カレンは勇気を出していつてみました。けれども墓地の門にもまだはいらないうちに、カレンはじぶんの目の前を踊っていく赤いくつを見たので、つくづくこわくなって、心のそこからしみじみ悔いを感じました。

そこでカレンは、坊さんのうちにいつて、どうぞ女中に使つて下さいとたのみました。そして、なまけずにいっしょうけんめい、

はたらけるだけはたらきますといいました。お給きゆうぎん金などはい
ただこうとおもいません。ただ、心のただしい人びととひとつ屋
根の下でくらすせていただきたいのです。こういうので、坊さん
の奥さまは、カレンをかわいそうにおもってつかうことにしまし
た。そしてカレンはたいそうよく働いて、考えぶかくもなりまし
た。夕方になって、坊さんが高い声で聖書をよみますと、カレン
はしずかにすわって、じつと耳をかたむけていました。こどもた
ちは、みんなとてもカレンが好きでした。けれども、こどもたち
が着物や、身のまわりのことや、王さまのように美しくなりたい
などといいあっているとき、カレンは、ただ首を横にふっていま
した。

次の日曜日に、人びとはうちつれてお寺にいきました。そして、カレンも、いつしよにいかないかとさそわれました。けれどもカレンは、目にいっぱい涙をためて、悲しそうに松葉杖をじつとみつめていました。そこで、人びとは神さまのお声をきくために出かけましたが、カレンは、ひとりかなしく自分のせまいへやにはいっていきました。そのへやは、カレンのベットと一脚きやくのいすとが、やつとはいるだけの広さしかありませんでした。そこにカレンは、さんび歌の本を持っていすにすわりました。そして信心ぶかい心もちで、それを読んでいきますと、風につれて、お寺でひくオルガンの音ねが聞こえてきました。カレンは涙でぬれた顔をあげて、

「ああ、神さま、わたくしをお救いくださいまし。」と、いいました。

そのとき、お日さまはいかにもうらかなにかがやきわたりました。そしてカレンがあのお寺の戸口のところで見た天使とおなじ天使が、白い着物を着て、カレンの目の前に立ちました。けれどもこんどは鋭い剣のかわりに、ばらの花のいっばいさいたみごとな緑の枝を持っていました。天使がそれで天井にさわりますと、天井は高く高く上へのぼって行って、さわられたところは、どこものこらず金の星がきらきらかがやきだしました。天使はつぎにぐるりの壁にさわりました。すると壁はだんだん大きく大きくよこにひろがっていきました。そしてカレンの目に、鳴っているオ

ルガンがみえました。むかしの坊さんたちやその奥さまたちの古い像ぞうも見えました。信者のひとたちは、飾りたてたいすについて、さんび歌の本を見てうたっていました。お寺ごとそっくり、このせまいへやのなかにいるかわいそうな女の子のところへ動いて来たのでございます。それとも、カレンのへやが、そのままお寺へもっていかれたのでしょうか。——カレンは、坊さんのうちの人たちといっしよの席についていました。そしてちようどさんび歌をうたいおわって顔をあげたとき、この人たちはうなずいて、

「カレン、よくまあ、ここへきましたね。」といいました。

「これも神さまのお恵みでございます。」とカレンはいいました。そこで、オルガンは、鳴りわたり、こどもたちの合唱の声は、

やさしく、かわいらしくひびきました。うららかなお日さまの光が、窓からあたたかく流れこんで、カレンのすわっているお寺のいすを照らしました。けれどもカレンのこころはあんまりお日さまの光であふれて、たいらぎとよろこびであふれて、そのためにはりさけてしまいました。カレンのたましいは、お日さまの光にのつて、神さまの所へとんでいきました。そしてもうそこではたれもあの赤いくつのことをたずねるものはありませんでした。



青空文庫情報

底本：「新訳アンデルセン童話集 第二巻」同和春秋社

1955（昭和30）年7月15日初版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：鈴木厚司

2005年6月3日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

赤いくつ

DE RODE SKO

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 ハンス・クリスティアン・アンデルセン Hans Christian Andersen
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>